定本

織田作之助全集

第七巻

定本 織田作之助全集

第七巻

文泉堂書店

定本 **織田作之助全集 第七巻**
〈日本文学全集・選集叢刊第6次〉

昭和五十一年四月二十五日発行
著　者　織田作之助
発行者　谷地秀祐
印刷所　(株)平河工業社
製本所　(財)印刷局朝陽会
発行所　文泉堂書店
本　店　東京都千代田区神田神保町二―一四―六
電　話　東京(03)二六五局八九八一番(代表)
出版部　東京都千代田区神田神保町一―四九―一
電　話　東京(03)二六五局八九八三番
　　二九四局〇二五九番

(落丁・乱丁本はお取替いたします)

定本 織田作之助全集 第七巻 目次

私設渉外局……一一
郷愁……二三
文楽の人……三三
土曜夫人……九三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

冴子の外泊……二〇九
湯の町……二二一
二十番館の女……二三一
影絵……二四三

怖るべき女……二五九
中毒……二八七
死神……二九九
妖姫伝……三〇七

雨の都……三一七
西鶴名作集……三三三
夜光虫（シナリオ）……三五三
解説……吉行淳之介……三七八
作品解題……青山光二……三八二

定本

織田作之助全集　第七巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

私設涉外局

大阪に「フル会」という怪奇な名前の、風変りな文化人の会がある。

この会のことは、かつて一度も紹介されたことはなかったし、今後も恐らく紹介されることがないだろうから、この機会に話して置きたい。——というのは、米軍進駐後の大阪の模様を知るには、このあやしげな会のことを話すのが一番手っとり早い方法だと、思うからである。

「フル会」の会員は全部で四人、会の目的とするところは、単なる浮世のうさ晴らしに四人の者が月に一回か二回か三回か、気の向いた時に、某所に集って、駄洒落と冗句を連発しながら、軽佻浮薄な、それだけにまた、当人にとっては真剣な、莫迦話に打ち興じて浮世を忘れようというのだから、まことに呆れ果てた会だと、言わずばなるまい。

四人の会員は、何れ劣らぬヒンシュクに値する人物ばかりで、自称「日本軽佻派作家」の若き小説家、自称「誤植の天才記者」たる新聞社の校正係、自称「マタタビ派」の放浪歌人、自称「合法的自殺援助業」の藪医者、——と、挙げるだにいまわしい限りである。彼等は何れも自ら「阿呆」であると称していたので、この会ははじめ「阿呆会」と命名されていたのだが、戦争が終って、大阪の町々に横文字の標札が立てられ、新大阪ホテルの前に星条旗がひるがえり、歌舞伎座のスケート場が「キャバレエ・カブキ」になり変り、御堂筋をジープが走り、米兵が氾濫し、やがて、その変貌もめずらしくなくなったという今日この頃になると、

「今や世をあげて、ブロークン・イングリッシュ時代だから、われわれの会も一つ英語の名前に変えようではないか」

ということになった。

そこで、誤植の天才記者が、

「フール会というのはどうだい？　阿呆は英語でフールだからね」

と、提案すると、日本軽佻派作家がすぐ口を出して、

「フール会とはフルってるね。しかし、誤植の天才が命名するんだから、いっそフールをフルと誤植してみては、どうだね。——というのは外でもない。話が文壇的になって恐縮だが、昔岩野泡鳴という作家兼評論家兼翻訳家がいて、さかんにあやしげな翻訳をやって時の読者人を悩ましたが、この泡鳴という男の訳たるや、稀代の悪訳で、この男に掛るとボードレエルがボドレル、ヴェルレエヌがベルレン、アアサア・シモンがアサ・シモ、ポオがポになってしまうので、当時の不同調という雑誌で、泡鳴流の読み方

をすると、当人の岩野泡鳴はホメ、島村抱月はホゲツ、森田草平はソヘ、生田長江はチョコ、まるで板チョコではないかと罵倒されたことがあると、宇野コジ（浩二）が言ったが、われわれも一つ岩野ホメにあやかって、阿呆会をフル会としようではないか」

と、一同にはかると、まず誤植の天才は、

「異議なしだ。僕なんか新聞の活字にルビをフルのが商売だからね、フル会会員の資格に欠けるところなしだ」

と、もう洒落がはじまった。

「いや、フルのが資格なら、僕はどうせ一生を棒にフル男だからね」

と、若き作家が直ちに応酬すると、ドクトルもおくれてなるものかと、

「僕も大いにフルね」

「何を……？」

「体温計をフルさ」

「苦しいね」

と、ひやかすと、

「じゃ、女でもフルことにするかな」

と、ドクトルはすかさずやり返した。

マタタビ派の放浪歌人はその時まで、しきりに首を振りながら、黙黙として、何かよき洒落もがなと思案していたが、やがて急に、あやしげな朗誦口調を張り上げて、

「それがしは首をフルフル、フルもよしフラざるもよし。——ってのはどうだい。万葉調だよ」

この人物は、絶えず首を振る癖があったのだ。

「じゃ、僕も一句」

と、誤植の天才が言った。

「——御堂筋雨雨雨のジープかな。——ってのはどうだい」

「月並だね」

と、歌人。

「莫迦をいえ。この雨雨雨と重ねたところが苦心の存するところだ。この雨はただの雨ではない。アメリカのアメだ。つまり雨が御堂筋に降り、アメリカのジープが並んでいるという句だ」

「なるほど、御堂筋雨雨雨のジープかな——か。まるで、吃りが作った句みたいだね」

と、作家が言ったので、一同噴き出してしまった。

さて、笑いがやむと、ドクトルが生真面目な顔をして、

「しかし、進駐軍は大人しいね。こんなに大人しいと思わなかったよ。関西へ進駐した第六軍は、歴戦の勇士だというらしいが、実に柔和だね」

と、言いだすと、歌人はすかさず、

「つまり、ドクトル考案の牧師服も要らなくなったというわけだね」

牧師服というのはこうである。

――八月十六日、つまり戦争が終った翌日既に米兵が東京湾から上陸して、今月中にも大阪へ進駐して来るだろうというデマが飛んで、そのデマに附随してさまざまな杞憂説が唱えられたので、ドクトルはあわて出して、

「僕は米兵が来たら、牧師服を着ることにしたよ。牧師の恰好をして、うなだれて、しずかに、さびしく、足許を見つめながら歩くんだね。こうすれば一番安全だよ。――ところで、牧師服をどこで手に入れるという問題だが、倖いあの防空幕がもう要らなくなったから、あれで作ったらいい。但し仕立がわるいと、一寸便衣隊に見えて、かえってわるいかも知れんよ」

と、珍妙な説を述べた――それを、歌人がひやかしたわけである。

「しかし、僕は大人しいというより、むしろイナセだと思ったよ」

と、急に変なことを言ひ出したのは、若き軽佻派作家である。

「へえ？　イナセだとはどういうわけだ？」

すると、軽佻派はおもむろに煙草を吹かして、

「まず、昨日僕が難波駅に立っていると……」

「寝ている筈がない」

「半畳入れると困るね。――立っていると……」

「立っていたのは分ったよ。それから……」

「うるさいね。――立っているとだね」

「よく立ちたがる男だよ、君は」

「黙れ！　――立っていると、米兵が傍へ来て、いきなり僕の肩を敲いて（若けえの）と日本語で呼びかけた。（若けえの、お待ちなせえ）――まるで幡随院長兵衛だね。僕は且つはぎょっとし、且つはイナセだと思ったね」

「えッ？　本当かい、そりゃ。本当に日本語で（若けえの）と言ったのかい」

「言ったと、そう思ったんだよ。ところが、その時、僕の耳は誤植の天才の如く、誤植を犯していたんだね。（若けえの）と聴えたのだが、よく聴いてみると、ワケヤマと言ったんだよ。ワケヤマ即ちワカヤマ（和歌山）のことだよ」

「なアんのことだい！」

一同がっかりしてしまったが、軽佻派は澄ました顔で続けた。

「ワカヤマに行くのは、どう行けばいいかときいているんだね。つまり、和歌山に進駐している米兵が、大阪見物に来た帰りなんだ」

「で、君はどうした……？」

「このナンバ駅から、和歌山行の南海電車に乗ればいいと教えようと、思った」

「日本語で……？」

「いや、英語で……」

「なるほど、教えようと思ったんだね。永遠に思ったんだね。思っただけで、教えられなかったんだろう？」

と、軽佻派の英語会話力は、簡単に軽蔑されてしまった。
「莫迦をいえ、親切に教えたよ」
「昔から、親切に教えることを、手をとって教えるというが、君自身もまた手をとって、自分の手をとって、つまり、口でなく、手真似で教えたわけだね。実際、ユー・アー・ベリ・カインド（君は非常に親切）だよ」
「何をぬかす？」
と、軽佻派は意気込んだが、
「——ところがだね」
と、だんだんあやしくなって、
「——南海電車に乗れという、乗るという英語がどうしても泛んで来ないんだ。だんだん人が集って来る。きまりが悪くなったので、窮余の一策、カモン・ウイズ・ミイ（我と一緒に来たまえ）とやって、アイ・シャル・ゴー・ウイズ・ユー（我も一緒に行くであろう）と言いながら、その米兵と一緒にプラットホームへ行って、和歌山行の電車に乗った。電車はやがて動きだした」
「描写が細かいね。さすがに作家といいたいところだ」
「ありがとう。動きだすと、丁度高架の上を走っているもんだから、歌舞伎座の七階のキャバレエの赤い灯が見えた。まるで不夜城だね。美しいと思ったよ。もっとも、行ってみると、存外チャチで、幻滅らしいがね。美しいといえばだね、あの新大阪ホテルの前の……」
「おい、脱線かい。私設ガイドの一場はどうなったんだい」
「そう急ぐな。ワカヤマまでは遠いんだからね。だいいち、電車に乗ってるんだ、脱線もするよ。——あの新大阪ホテルの前に掲げられている星条旗だね、あれをはじめて見た時目がさめるように綺麗だと思ったよ。久し振りに色を見るという感じだね」
「イロ……？　情婦のことかい？」
「いや、カラーだ。戦争中、色というものはどこにもなかったからね。あの日の丸も本当は清浄なんだが、扇子につけたり、手拭につけたりするようになってから、薄汚くなったからね。実際、米兵が進駐して、はじめて大阪に色が出現したという感じだよ。彼等の吸っているラッキーストライクだとか、キャメル、チェスターフィールド、オールドゴールドの箱なんて、実に綺麗だよ。彼等は戦争中も色を忘れなかったわけだ。もっとも彼等は日本の着物や帯の色を見て、綺麗なので、びっくりしているらしいがね」
「煙草といえばだね……」
と、新聞記者が口をはさんだ。
「——彼等の吸っている煙草は何種類あるか知ってるかい？　僕の調べたところによると、ラッキーストライク、キャメル、チェスターフィールド、オールドゴールド、フィリップモリス、それからラーレイというのは日本のほまれに当るらしいね。ラーレイというのは、人間の名で、たし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com